白光

北から南から
法話エッセイ

西方極楽浄土に想いをはせる

神奈川県逗子市　正覚寺住職
脇川公鴨

鎌倉にはかつて、海岸線から江ノ島、富士山まで見渡せる住吉城というお城がありました。私が副住職を務める正覚寺は、城跡のある高台にあります。天気さえよければ季節を問わず、境内から沈みゆく夕陽を見ることができます。中でも、太陽が真東から登り真西に沈むお彼岸の時間は、本堂の正面からもその様子を望むことができます。富士山の向こうに陽が沈むわずかな時間、太陽の光が海面にキラキラと反射し黄金色に染まる様は、言葉では言い表せない美しさであり、心奪われる光景です。

法然上人が浄土宗を開く上で師と仰いだ中国の善導大師は、「春分、秋分の太陽が真西に沈む日は、極楽浄土を想い、往生の願いを新たにするのに最適」と説かれています。あの黄金色の海と夕陽、その先にはまさに阿弥陀さまが構えられた極楽浄土がある。そのように感じる光景です。当たり前のように日々生活をしていると、この命が永遠に続いていくような思いすら持ってしまいます。しかし、人として生きているかぎりは年をとり、人生の終わる時が訪れることはまぎれもない事実。その間、私たちは様々な要因で頭を悩ませ、心を煩わせ、その苦しみから逃れることは叶いません。このような私たちでありますが、人として生まれたからこそ仏教に出会え、法然上人がお示しになったお念仏の教えに出会えたのです。

人としての命終わるときに、また再び迷い苦しみのある娑婆世界をめぐるのではなく、阿弥陀さまの西方極楽浄土に往き生まれさせていただける教え、これが「南無阿弥陀仏」のお念仏です。だからこそ、私たちは阿弥陀仏のお約束である「私の名前を呼ぶものは必ず救う」という、このお念仏の教えを深く信じ、南無阿弥陀仏とお称えすることを何よりも大切にするのです。悩み多き私たちですが、全てを阿弥陀さまにお任せすると、せわしい毎日も充実した日々となっていきます。

令和二年　年回表　2020年(子年)

一周忌	令和元年
三回忌	平成三十年
七回忌	平成二十六年
十三回忌	平成二十年
十七回忌	平成十六年
二十五回忌	平成八年
三十三回忌	昭和六十三年
五十回忌	昭和四十六年
百回忌	大正十年
二百回忌	文政四年
三百回忌	享保五年

朝に合掌・夕に感謝

浄土宗の基礎知識 No.13

葬儀式①

【そうぎしき】

死は何時どこで訪れるかわかりません。考えるだけでも大きな恐怖です。現代人は、死の問題にはあまり触れようとしません。死期が近づいた病人でも、最後まで真実を知らないことが多いのです。お念仏の声をきけば、死を想起するために、縁起でもないというのです。現代人は、お念仏に対して大きな誤解をしていることがわかります。この誤解のままでは、死を正しく受けとめることはできません。この至らない自分にも、救いの手をさしのべてくださる仏様があったのだと、生も死も任せきったところに、死に対応する心が備わってくるのです。会者定離はこの世の定めと知りながらも愛別離苦は悲しいことです。しかし仏様の来迎を念じ、仏様にすべてを任せて、静かにお念仏する中で、みんなに感謝して息を引きとることができるのは、どんなに有難いことでしょうか。

命終を迎えるとしばらくは家の者だけで、心静かにお念仏する時間がほしいものです。そのためにも平素よりご家族の方々がお念仏の生活を心がけることが大事で、落ち着いてその後の準備ができるようにしておきたいものです。

一、菩提寺への通知
　①死亡者の氏名、年齢（生年月日）　②死亡日時、場所、死因
　③喪主名、続柄、連絡先　④授戒、五重相伝の受否
　⑤先亡の伴侶があれば、その方の戒名
一、親戚縁者への通知
一、業者（葬儀社等）への連絡
一、室内の整頓
一、仏壇の荘厳

ということになります。授戒などの受否の確認は、戒名授与のために必要であり、受けられていれば、他寺で頂かれた場合も含めて、その巻物を持参されればよいでしょう。

光祐寺報

現代社会とお念仏

Vol.10

安養寺
松島 靖朗（まつしま せいろう）さん

奈良教区の安養寺住職。
総本山知恩院布教師。1975年生まれ。早稲田大学卒業後、一般企業にてインターネット関連事業、企業経営に従事。一念発起して実家のお寺に戻り、求道念仏生活を送る。インターネット寺院「彼岸寺」にコラム連載、共著に『小さな心から抜け出すお坊さんの1日1説法』(永岡書店)、寄稿に『宗教と現代がわかる本2013』(平凡社)。

「結縁社会」

私たちはご縁の中で生きています。家族親族の血縁、生活地域の地縁、学校で同窓縁、会社で社縁。何かを成し遂げるための志縁。

若者たちが複数人で部屋を借りて共同生活するシェアハウスが増えているそうです。遠くの親戚より近くの他人。いざというときに頼りになるのは遠く離れて暮らす家族親類ではなく、近所に住んでいる他人だという故事が現代にも生きています。介護施設や病院で生活を共にする、おひとりさまが生前個人墓を求め、同じ境遇の者同士が墓友として交流するなど、時代を反映する新しいご縁も生まれています。

社会構造や生活環境の変化によって、人と人との新しいつながりが生まれ、共通点をくくる新しい言葉でご縁が表現されます。これまで当たり前だった繋がりが持続できなくなったり、旧来のご縁の煩わしさから逃れたい願望の現れ、という側面もあるのでしょう。新しいご縁によって、一時の楽を得ることはできますが次第に苦しくなるのも事実でしょう。私たちにとって世俗的なご縁は不安定なものなのです。

母子家庭の貧困問題。貧困という言葉を紐解いてみると、そこには単純にお金がないという貧乏状態だけでなく、縁をなくした孤立生活が浮かび上がります。単身世帯の割合も近年増加傾向にあります。ますます人々の生活は孤立化していく傾向が危惧されています。無縁社会とはよくいったものです。

有縁無縁の現代社会に必要なものは、世俗的な不安定な繋がりではなく、絶対的な存在とのご縁です。どんなに時代が変わっても、我々の目の前に存在するのが仏さまとのご縁です。阿弥陀さまにすがり、お念仏を申し、極楽浄土へ往く。その時限りではなく、後生まで約束されたみ教えとの出会いがお念仏のご縁です。

なんとも不思議なご縁ですが、お出会いさせていただいた我々だけで途絶えてはなりません。お念仏の「み教え」に出会う結縁者を増やすことが、無縁社会化する現代の流れを止める一助になるのです。

ブッダと法然

～その比較から見えてくるもの～

第一回　ブッダと法然を重ねてみると

京都文教大学学長　平岡（ひらおか）　聡（さとし）

■二つの大山

ブッダと法然（敬称略）。私は人生の中で知の巨人に二人も出会ってしまいました。浄土宗の僧侶であり、またインド仏教を研究する私にとって、二人とも私の心に深く根をはり、私の人生観や価値観に絶大な影響を与え続けています。法然の思想に慣れ親しんだ者にとって、選択肢が複数ある場合は、どちらか一方を選び取るという『選択（せんちゃく）』の発想になるのですが「ブッダと法然のいずれか一人を選択せよ」と言われたら、私はたちどころに答えに窮してしまいます。というわけで、ブッダと法然は私の心にそびえ立つ二つの大山だったのですが、あるとき、その大山を重ねてみたところ、両者の共通点や相違点が鮮明になり、さらに深いブッダと法然の理解を私にもたらしてくれました。二人の生涯には比較可能な点が多く、それぞれ個別にというよりは、比較した方がより深く二人の生涯を理解できることを、この連載でお伝えできたらと考えています。

■研究者でもなく、小説家でもなく

ブッダや法然の生涯や思想にアプローチする場合、大きく分けて二つの態度が存在します。

一つは学問的態度。研究者は様々な学問的手法を駆使し、残された文献から「最も確からしい」要素を抽出し、それをつなぎ合わせて歴史的ブッダ像・法然像に迫ろうとしてきましたが、私から言わせれば、それすら「歴史を作ったブッダ・法然」ではありません。もちろん、「歴史が作ったブッダ・法然」の中に「歴史を作ったブッダ・法然」の要素は含まれているのでしょうが、両者を厳密に区別することは不可能です。

もう一つは、ブッダや法然を自らの進行に照らして理解する態度です。実際の信仰において、特に苦しいときなど、「こんなときブッダなら、法然さんなら、きっとこうしてくださるはずだ、こういってくださるはずだ」と考えることがありますね。そのような言動はその人が創りだしたものであり、実際の文献には存在しませんが、文献に残された言動以上に、当人にとって意味をもつことがあります。

このような態度は、現代人だけでなく、文献の伝承者（直弟子や伝記作者など）も持っていたはずであり、その思いが現在の文献や伝記の記述に反映されている可能性は大いにあります。そして、その「歴史が作ったブッダ・法然」はさらに次世代の人々の脳を通過して洗練され、さらなる「歴史が作ったブッダ・法然」が新たにできあがるというわけです。

私は「歴史が作ったブッダ・法然」には価値がないと言いたいわけではありません。否、むしろ「歴史が作ったブッダ・法然」こそ、信仰において重要な意味を持つと言いたいのです。われわれは何事も自分が獲得した体験と言葉に基づいてしか理解できないし、その経験や言語は人によって千差万別ですから、同じリンゴを見ても、見る人によって惹（ひ）き起こされるリンゴのイメージは、どれ一つとして同じではないはずです。

同様に、普遍的なブッダ像・法然像など存在しません。あるものは、個々人の脳を通して理解された個別のブッダ像・法然像のみ。個別人の信仰においてはそれでいいのですが、教団という組織ができあがればその組織を一つに維持するために、複数の教義やブッダ像・法然像は『宗学（しゅうがく）』の名のもとに正統性の教義や唯一のブッダ像・法然像に収斂（しゅうれん）させる必要があるのです。しかし、それはそれで、意味があります。なぜなら、それこそが多様な個々の教義理解やブッダ像・法然像を生み出す『祖型』になるからです。さて、この連載における私の態度ですが、私は研究者の端く

れですので、従来の文献研究が明らかにしたブッダ・法然は尊重しながらも、ぎりぎりのところで文献にはない「私（平岡）が作ったブッダ・法然」像も提示したいと考えています。この連載は学術論文ではないので、文献からは一歩も外に踏み外さないという態度はとりません。かといって、文献の記述を無視し、まったく自由な立場から、小説家よろしく荒唐無稽な発想もしません。中途半端ではありますが、その中間辺りをウロウロしながらら、中途半端な者だからこそ描き出せる「歴史が作ったブッダ・法然」を提示するつもりです。

■「パラダイムシフト」という共通点

二人の共通点をピタリと言い当てる言葉を探していたとき、私は「パラダイムシフト」という言葉に行きつきました。これは「パラダイム（paradigm）」と「シフト（shift）」の合成語であり、パラダイムは「模範・典型」を意味しますが、ここでは「（ある時代に支配的な）思考の枠組（＝常識・価値観）」と言い換えておきましょう。そしてシフトは「転換・交換」を意味するので「パラダイムシフト」とは「思考の枠組（常識・価値観）の転換」となります。しかし、単に転換するのでなく、それが一八〇度『根底から覆る』という意味での転換です。例えば天動説から地動説へのパラダイムシフト。地球に暮らす者にとって、太陽は東から登り、西に沈むように見ええます。地動説が常識となっている現代人でさえ、感覚的には地球が動いているとは感じませんし、太陽の方が移動しているように見えます。ですから、古代人ならなおさら太陽の方が動いていることを疑わなかったでしょう。ところが学問（科学）の発達により、動いているのは太陽ではなく、地球の方であることが分かったのです。その事実を知らされた当時の人々の驚きたるや、いかばかりであったか。これがパラダイムシフトであり、そこには大きな『衝撃』がともなうのもその特徴です。同じような価値観の転換が宗教界でも起こりました。二千五百年前のインドにブッダが、そして九百年前の日本に法然が登場し、自らの思想的宗教的立場を表明したことで、従来の思想・宗教の価値観や常識は完全にパラダイムシフト、つまり根底から覆ってしまったのです。その衝撃の大きさは特に法然の場合、想像を絶するものがあります。いかなる衝撃が走り、具体的に何がどう変わったのかについてはこの連載の中でお伝えしていきますので、しばらくのご辛抱を。両者の共通点はまだあります。暦（カレンダー）違いますが、誕生日はブッダが四月八日、法然は四月七日。入滅もブッダが二月十五、法然が二月二十五日なので、同じような数字が並んでいますね。これを偶然の一致と見るか、あるいは何らかの意図が働いているとみるか。

では次回から、ときにはズームインして主観的に、ときにはズームアウトして客観的に二人の生涯を比較し、その共通点と相違点を明らかにしながら、一石二鳥でブッダと法然の生涯を理解していきましょう。また仏教や宗教の周辺分野にも足を踏み入れ、ブッダと法然の生涯や思想に従来とは違った観点から光を当て、その特徴を浮き彫りにしていくつもりです。こうして、寄り道しながらも、最終回のゴールにたどり着ければと思いますので、よろしくお付き合い下さい。

亡き方を想う 春彼岸

3月17日～23日

寒さ和らいで春を感じる季節となりました。そろそろお彼岸の季節ですね。春分の日を中日とした7日間を「春彼岸」といい、多くの寺院で法要が勤められます。「彼岸」は、「彼方の岸」をさし、「此岸」（私たちの生きる世界）の向こう側、阿弥陀さまの西方極楽浄土を意味します。『観無量寿経』には、西に沈む夕日の先に極楽浄土を想いうかべる「日想観」という修行が説かれています。春分と秋分は、太陽が真西に沈むことから、それに最も適した日といえます。法然上人が師と仰ぐ中国善導大師は「日想観」を実践し極楽往生の願いを新たにするよう教えられました。浄土宗ではこれに倣い、自身の極楽往生を願うとともに、ご先祖さまを供養する法要として彼岸会が勤められるようになりました。お浄土にいる「あの方」に想いを馳せ、ご本尊とご先祖さまにお念仏を称えてください。

総本山知恩院 国宝「御影堂」

平成の大修理終え、今春4月に落慶へ

浄土宗総本山知恩院（京都市東山区・伊藤唯眞門跡）の国宝「御影堂」の約9年にわたる大修理が完了し1月29日、報道陣向けに内覧会が行われた。御影堂は慶長8年（1603）に徳川家康が建立。火災で一度焼失したが家光が寛永16年（1639）に再建。明治時代まで4度の大規模修理が行われてきた。約100年ぶりとなった今回の大修理は平成23年の「法然上人800年大遠忌」記念事業の一環で、380年前の再建以来、最大規模となった。修理前の調査で、屋根瓦8万5千枚のうち約8割が再建当時のものと判明し、今回その一部は再利用。堂内の仏具約200点を修理、新調した。そのうち、天井から吊り下がる六角形の幢幡は以前の物より大きなものに新調し、長さ6，2メートル、重さ約400キロで世界最大級となった。堂内中央に安置されている法然上人を祀るための宮殿や内陣の荘厳具は金箔がふんだんに使用されて美しい輝きを放ち、足を踏み入れた報道陣からは感嘆の声がもれた。御影堂の落慶法要は4月13日から15日まで、その後、法然上人の忌日法要「御忌」が4月18日から25日まで営まれ、一般も参加できる。

てくてく法然さまの道 総本山知恩院御忌編

御忌に参拝してみよう

イラスト・柴田かおる

檀信徒会たより

旧地蔵尊は御堂に収め新地蔵尊を迎え令和元年8月24日“みそなめ地蔵祭”にて開眼法要

・予定を上回るご芳志をいただき立派な地蔵堂と、新地蔵尊をお迎えすることができました。
・今後、賽銭箱、植栽の整備や地蔵祭のぼり旗を新調する等みそなめ地蔵さまを賑やかにお祀りする取組を計画中です。
・本年の“みそなめ地蔵祭”までには銘鈑を設置する予定ですので、**3月末**で募財は〆切とさせていただきます。

新みそなめ地蔵尊　寄付（中間）決算

令和2年3月現在

収入の部			
特別寄進	新地蔵尊建立		（篤志）
寄進	5(口)× 7	35	700,000
	3(口)× 1	3	60,000
	2(口)× 6	12	240,000
	1(口)× 93	93	1,860,000
	他 3	-	25,000
合　計		143	2,885,000

支出の部	
旧地蔵尊御堂	460,000
旧地蔵尊台座	950,400
新地蔵尊台座・供物台	585,900
六地蔵尊移設	155,520
竹垣・地蔵堂幕	43,360
振込手数料	14,427
小　計	2,209,607
予算外計画事業計画（案）	
銘板製作費	200,000
地蔵祭のぼり旗（100枚）	250,000
賽銭箱・植栽など	175,545
小　計	675,393
合　計	2,885,000